

講演録

うわさとパニック¹⁾サトウタツヤ²⁾

The rumor and the panic

SATO Tatsuya

1 はじめに(語の定義など)

なぜうわさを研究するのだろうか？それは単に面白いからだということ。面白いことを研究する方がいいに決まっている。

とはいえ、社会的な意義のようなものもある。それは、うわさがパニックをひきおこすことがあり、そのパニックが大きな混乱を引き起こすことがあるということである。

うわさが元で人の命が奪われることがある。

つまり、うわさやパニックは単に面白いと喜んでいられる現象ではなく、命にかかわる場合があり、そのメカニズムの理解が待たれている現象なのである。

1-1 うわさとは？

では、うわさとはどんな意味だろうか？

「うわさ = 情報空間を埋める憶測」

と考えることにしよう。

また、うわさの特徴は、「真か偽か(ホントかウソか)分からないのにもかかわらず、『ホントっぽい』と思われて流れる情報だ」ということが言える。

ここで、注意することとして、うわさとデマは学問上は異なる概念だということがある。

社会心理学において、デマとは「意図的な情報操作」のことで、誤情報、ウソだと知っていて情報を流したり、わざと間違った情報を流すことを言う。

それに対してうわさは、自然発生的な情報流通のことを指すのである。そして、真偽自体は問題にならない。結果的に正しい情報であっても、その反対に間違った情報であってもいい。真偽自体を問うことなく「ホントだ、もしくはホントっぽい」として流れていくのがうわさなのである。

1-2 パニックとは？

次にパニックの定義に移ろう。パニックには個人的なものもあるが、ここでは、集合的なパニックのみを考えていくことにする。

パニックについてたとえばスメルサー(1962)は「ヒステリー的信念に基づく集合的な逃走」としているし、「極端な利己的状态への集合的な退行」という考え方もある(ラングによる)がここでは「突然発生した予期しない恐怖で、抵抗不可能なものであり、多くの人々が同時にそれに影響される状態で多くの場合逃走や混乱が見られる」状態だと考えておく。

パニックが生起するためにはある程度の行動の自由が必要であり、火事などで非常口に入人が集まってパニックになるのは移動が可能だから

1) 本稿は第2648回立命館大学土曜講座(2003年7月26日)で行った講演に基づいている。

2) 立命館大学文学部心理学科

である。墜落しそうな飛行機上においては、出口が確保されていないので、(個々人の心中はともかく)その機内中がパニック状態になることはない。

パニックは内容的に、暴行パニック、獲得(確保)パニック、逃走パニック、に分類される。

なお、パニックの語源はギリシア神話の神の名前である。それは「パン」という神である。このパンは普段は愛される存在だが、昼寝中に安眠を妨げられると、機嫌が著しく悪くなって騒いでしまうのだという。そして、近くの羊たちが狂乱して大騒ぎになる。こうしたことから、パニックという現象の名前がついたのだという。

2 うわさとパニックの実際

以下では、実際におきた、うわさとパニックの実例について見ていく。

関東大震災(1923)の時の暴行・虐殺
第二次世界大戦末期(1945)のうわさ
中部地方での取り付け騒ぎ(1973)
である。

2-1 関東大震災とうわさ

1923(大正12)年9月1日におきた関東大震災は、近代化していた大都市に起きた大規模地震であり、それ自体が大きな厄災を人々にもたらした。しかし、さらに、日本人による他民族襲撃(虐殺)が起きたという点で、うわさ研究にとっても重要な現象である。

当時、日本は第一次世界大戦の戦勝国であったし、既に、朝鮮半島や台湾という植民地を持つ帝国主義国家であった。

地震が起きたとき、都市に住む人々は、混乱に乗じてこうした被支配民族が日本人を襲うのではないかと考えたのであり、だから、襲われる前に襲おうとして虐殺に走ったのであろう。

つまり、当時の日本人たちは、襲われても仕方ないようなことをしていると思っていた。

そして、自分たちが持っている敵意を、外国人が持っていると思いついでうわさが流れ、暴行に及んだのであろう。

この虐殺には国の機関が積極的に関与したという仮説が歴史学を中心に提唱されているが、ここではそこまで極端な立場をとらない¹⁾。

うわさを発端にした「暴行パニック」の例だと考えておきたい。

2-2 日本での太平洋戦争末期のうわさ

敗戦が色濃くなったころ、庶民には「朝、らっきょうだけで飯を食うと爆弾があたらない」など個人の身辺に関する願いがうわさとして流れていた。

ただし、「この戦争は日本が負ける」のような戦争動向に関するものは、憲兵の取り締まりの対象になっていた。

ここに、うわさ、というものの興味深い性質が見え隠れする。

まず、重大な関心事である自身の生命や戦争の行く末についての話が多い。

そして、情報が無いためにそれを埋めようとする行為である。

今日でも、都合がいいことだけしか発表しないことを「大本営発表」というように、戦争中の日本では、情報の管理が厳しかった。敵国の空襲が毎日あるのに、新聞では日本が勝っているという「大本営発表」しか載っていない。情報の隙間を埋めようとするうわさが流れるのは当然のことであった。

しかし、こうしたうわさの中には戦争遂行にとって都合が悪いことがあり、それは当局による取り締まりの対象となったのだった。

真実が語られてもうわさになる状況があったのである。このことは銘記されるべきであり、このような状況を再び作りだすようなことにな

ってはならないだろう。

2 - 3 信用金庫取り付け騒ぎ

この事件は、1973（昭和48）年に起きたもので、うわさが発端で多くの人が自分の預金を信用金庫から引き出そうとして大騒ぎになったものであり、うわさ パニックという発展をとげた分かりやすい例であるが、それよりも「うわさの発信源が分かった珍しい例」として有名である。

うわさは普通、その発信源も流通経路もその一部しか明らかにならないことが多い。

しかし、この事件では警察が「偽計業務妨害」の容疑で捜査にあたったため、ほぼ全容が解明されたのである。

そして、5000人以上が信じたこの話の発端は、女子高生の他愛ないおしゃべり、世間話だったのである。

およそのルートは下記のようにあった（図1）。

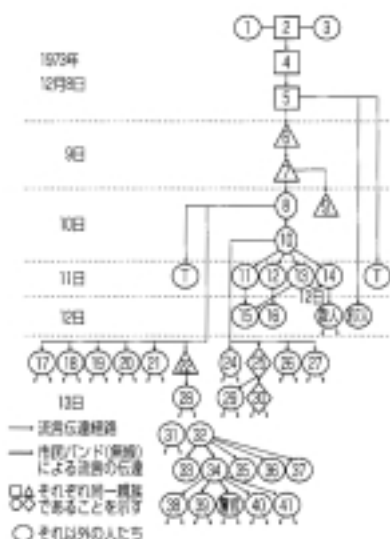


図1 取り付け騒ぎのルート（木下，1977）

番号1，2，3は女子高生で、友だち同士で、

「信用金庫は危ない」のような話をしていたのであるが、それが広がったのだ。

ルートの特徴としては、

- 1 親族など親密なネットワークが活用された
 - 2 市民無線による迅速な情報流通
- ということがあった。現在ならインターネットやケータイメールが使用されたことであろう。

また、この図の中に登場する全ての人がうわさを流したのではなく、うわさを他の人に回さなかった人もいるが、この人達にしても「これはウソ」と否定して回るようなことまではしなかったので拡大を防げなかった。

ではこの騒ぎはどのように沈静したのか。

まず、大蔵省（当時）が、この信用金庫は安全だと宣言した。また、より重要なことは、預金を引き下ろそうとした人たちの目の前に現金を積み上げて、返金していったのである。

人々の不安は、自分の預金がおろせないことであるから、実際に現金があることが分かれば安心してパニックにはならないのである。

さて、取り付け騒ぎの概要は以上のようなのであるが、女子高生が「信用金庫は危ない」とおしゃべりをするだけでこんな大騒ぎが起きるなら、同様の騒ぎがもっとたくさん起きているはずである。実際にはそれほど起きていないのにこの時に大きな騒ぎになってしまったのは、この事例ならではの特殊な背景があったからである。

それは数年前に、同じ地域で実際に金融機関が破綻したことがあり、損をした人がいたということである。

前に一度、自分の預金を失ったことがある人たちが、それを見聞きしていた人たちが、似たようなことが起きる前に自分の預金だけは安全にしておこうとして信用金庫の窓口に行ったのである。そういう意味でこの騒ぎは「うわさ」を発端にした「確保パニック」の例だと言える。

2 - 4 パニック騒動の例

以下では、パニックの例について見ておきたい。

- 1 アメリカ・ラジオ番組での火星人襲来騒動
- 2 日本・紙不足パニック（予言の自己成就）

である。この他、火災・事故一般に際して出口・非常口に殺到することでおきる「人なだれ」状態のパニックもあるがここでは扱わない。

火星人襲来騒動

この騒動は1938（昭和13）年に、アメリカのラジオ局で流れたラジオ番組が本当のことだと信じられてしまった例である。今でも健在な声優オーソン＝ウェルズが「火星人襲来の実況中継」の「ドラマ」を放送したのであるが、それがあまりにもリアルであり、多くの人が実際に火星人が襲来してきたと信じて騒ぎとなったのである。

ラジオ局に問い合わせたり、新聞の番組欄を見て冷静に対処した人もいるが、そうでない多くの人は逃げまどったのである。

この騒ぎの根底には「火星人がいるかもしれない」ということが漠然と信じられていたという背景もある。

1973年末の「紙不足パニック」

1973（昭和48）年末の「紙不足パニック」は日本を巻き込んだトイレトペーパーパニックとして知られている。大阪千里ニュータウンが発端だとされることが多いが、ここがパニックの発祥地かどうかは実際には不明である。

このパニックの背景としては当時の日本の社会状況があげられる。

当時、中東戦争によってオイルショック（原油不足）がおき、また、田中角栄首相（当時）による日本列島改造論が引きがねとなりインフレーション、狂乱物価が進行していた。つまり、人々は生活に対する大きな不安を持っていたの

である。

そこに、トイレトペーパーが無くなるという情報が入り、人々が殺到したのである。冷静に考えればトイレトペーパーの有無はそれほど重要ではないが、多くの人にはそれが重要なことだと思ってしまったのである。

また、この事例では、情報が行動を生み真実となるという「予言の自己成就」が見られた。

トイレトペーパーの在庫というのは、どのスーパーでもそれほど多くない。そこに多くの人が買いに行ったものだから、品切れが起きる。その後に買いに行った人は品切れのお知らせをみて「やはりトイレトペーパーは無いんだ」と思いこみ、自分の分を確保しようとして他のスーパーに走る、ということになったわけである。つまり、これも典型的な「確保パニック」である。

3 うわさの理論

ここまでいくつかの実例を見てきたが、こうした現象を心理学者はどのように説明しているのだろうか。

3 - 1 うわさの法則

まず、「うわさの法則」を見てみたい。

これはオルポートとポストマンという心理学者が提唱したもので、

$$R \sim I \times A$$

となっている。アルファベットの意味は

R = うわさの流布 (rumor)

I = 情報の重要さ (importance)

A = 情報の曖昧さ (ambiguity)

である。「 \sim 」というのは比例するという意味の記号である。

では「 $R \sim I \times A$ 」という式にはどのような

意味があるのか。

それは、“曖昧さ”が“重要さ”が両方とも大きければうわさになりやすいということである。そして、さらに重要なのは片方がゼロなら、うわさは流れないということである。かけ算の式は数字が1つでもゼロだと答えはゼロになる。

この式から、うわさにならないことがわかり、うわさを予防することにもつながる。

うわさの定式から言えるのは、重要さか曖昧さがゼロだとうわさは流れないということである。それぞれの例を考えてみよう。

曖昧だけれど重要ではないことの例

= どの歯ブラシが良いか。

歯ブラシはどれがいいか、ということを確認もって人に語れる人はいないだろう。しかし、この話題はそれほど重要ではないのでうわさにならない。「**っていう歯ブラシがいいよ」なんてうわさは誰も聞いたことがない。重要ではないから、曖昧であってもうわさにはならない。だからこそ、歯ブラシを作っている会社はコマーシャルなどを流して自分の会社の製品が良いということをアピールする必要がでてる。

重要だけれど曖昧じゃないことの例

= 選挙の結果(得票数)

選挙の結果というのは大抵の新聞に1票の単位まで結果が載っている。細かすぎるという感想をもつ人もいるのではないだろうか。しかし

候補 約1000票 当選

候補 約1000票 落選

のような報道だったらどうだろうか？票数の情報が曖昧であれば、おそらく、色々なうわさが流れるだろう。選挙の結果は人々の暮らしを左右する重要なものである。その重要な情報の曖昧さを無くすことは、うわさを防ぐことに役立つ

つのである。

3-2 流言集団

うわさの理論、次は、流言集団という概念(考え方)を紹介する。

流言集団とは、うわさを伝える人たちのことである。

つまり、同じ興味をもっている人たちのことであり、結果としてうわさでつながっている人たちのことを言う。先ほどのうわさの法則を逆の側面から説明したものだとも言える。つまり、何を重要で何を曖昧とするのか、が合意されているような集団が流言集団なのである。

流言集団の大きさは話題などによって異なる。誰でも関心を持つことと、ローカルな話題とがある。

たとえば、戦争など多くの人を巻き込む事件がおきると持続的で単一の流言集団ができやすいが、そうでない場合には、一時的で小さな流言集団しかできない。地震予知流言などはある(想定)震源地の周りにせいぜい数週間しか流れない、という意味でこの例にあてはまるだろう。

流言集団という考え方を使うと、うわさになることは以下のように表せる。

重要かつ曖昧で、流言集団を形成しやすいことはうわさになりやすい

たとえば、凶悪事件の犯人像が流言になりやすいのは下記のようなメカニズムによる。

人命にかかわる = 重要

犯人がわからない = 曖昧

次に誰か狙われるかも = 流言集団形成

3-3 うわさからみた「酒鬼薔薇事件」(1997)

いわゆる「酒鬼薔薇事件」の後におこった事例について考えてみよう。事件自体は、殺された男児の首が学校の門の前に置かれていたという猟奇的殺人でもある。

警察による徹底した情報管理が行われたことによって、「犯人は中年男性」といううわさが流れていた。そして実際の犯人は中学生であり大きな驚きをもたらした。この事件では、犯人という「重要」な情報が「曖昧」であり多くの人の関心をひいて「流言集団」を形成していたのである。この時のメカニズムは図2のように想定することができるだろう。



図2 「犯人は中年の男性」と思いこむプロセスの図式

3 - 4 2003年の長崎の少年事件

2003年に起きた、中学生による小児殺害事件でも、犯人(とされる)少年の顔写真がチェーンメール化して流通した。

携帯電話のメール機能を用いて、顔写真が多くの人の間を流れているのである。

この場合、実は、顔を見ること自体に意味はない。なぜなら、見た写真が真実かどうか確かめることができないからである。それにも関わらず「見たい」という気持ちがあり、誰かの写真を見ると安心してしまう。

曖昧な情報に人は耐えられないのである。だが、こうした情報流通は少年法の精神に反するものであるし、犯人以外の少年の顔写真が流れるとしたら重大な人権侵害である。犯人の顔写真を見たいのはうわさと一緒に、曖昧で重要だからにすぎない、と考えることが重要である。

実際、この事件に際しては複数の中学生の写真がチェーンメール化していた²⁾。

つまり、うわさの法則を知ることが人権侵害を防ぐことにつながるはずである。

4 うわさのフィールドワーク

うわさの実証的な心理学的研究はあまり多くない。実験をすることができないし、うわさは目に見えないので扱いにくい。

実際にうわさが起きた時に素早く出勤して調査(聞き取りやアンケート)する必要がある。

以下では筆者が行ったいくつかのうわさ研究について紹介してみたい。

4 - 1 うわさとしての当たり屋チラシ

図3は、1枚の紙に車を用いた「当たり屋」のナンバーリストが掲載されているものである。だが、このリストの内容は疑わしい。



図3 当たり屋チラシの例

仮にもし、当たり屋がいるとしても、彼らの側に立ってみれば、これが真実でないことは明らかである。こんなリストが出回って包囲網ができていのに、誰がこのナンバーの車で悪さをするだろうか！

また、私たちの調査によれば、これは1986年に始まった文書流言の一つであり 同じ車を10数年も乗り続ける人は今の日本にはいないだろうから 現時点で真実であるということはない。

ルートはどうやら山口県や京都府に出回ったチラシのようである。この時点で情報が正しかった可能性は否定しないが、現在では疑わしい。

この文書は、うわさ研究者にとって「鴨ネギ」のようなものである。なぜなら、うわさというものは普段目に見えないのであるが、これは、チラシという形で「うわさの可視化」がおきているからである。たとえば、文書に掲載されている車の数やナンバーなどが変わっているかどうかを検討すると、「うわさの尾ひれ」をみることができるのである。

また、うわさ話の調査をするのは雲をつかむような話であるが、「チラシ」の追跡調査は比較的容易となる。

1996年・八戸での調査

ここでは、1996年に筆者らが八戸で行った調査について簡単に説明する。

この年の5月、福島に当たり屋チラシが登場した。当時、福島大学行政社会学部に勤務していた著者は当たり屋チラシの一種を入手することができた。

なぜなら、大学の掲示板に貼ってあったからである。先の図3はその時のものである。

あたかも真実のように貼られているこのチラシを入手した後で、調査を開始したところ、5月に福島で見られたチラシは、その1ヶ月前の

4月には茨城で見られ、1ヶ月後の6月には宮城に移っていた。このことから、チラシは茨城 - 福島 - 仙台というルートを通して北上していたと考えられた。国道4号線のルートである。そして、このチラシはそのまま行くとさらに北上すると考えられた。



図4 1996年初夏の当たり屋チラシ移動
(岩手県のデータは収集できなかった)

そして、実際、1996年の8月、チラシは青森県に到達したのであった(図4)。

たまたま、ゼミの学生が青森県八戸市に住んでいたのだが、その彼の家に、回覧板として当たり屋チラシが回っていたのであった。

学生から連絡を受けた私は彼と一緒に八戸で調査を行った。

面接調査などを行った結果、当たり屋チラシの流通にはいくつかの特徴があった。

まず、チラシの出所は警察や消防署など、公的機関だと思い込んでいる人が多かった。

次に、情報を疑う人は少なく、信じた人は善意によって当たり屋チラシを伝えていた。

つまり、当たり屋チラシは「貴重な」「注意すべき」情報として流れていたことになる。

ちなみに、たとえウソでも、交通安全意識を高めるからこうしたチラシには意義があるとい

う考えもありうるが、このリストに自分のうちの車の番号が書いてあったらどう思うだろうか。

交通安全意識を高めるためには、当たり屋チランではなく他の方法を使うべきであろう。

4-2 地震予知のうわさ

日本は地震国であり、「地震がくるかもしれない」という推測は頻繁になされているし、実際にはうわさ(地震予知流言)もかなり頻繁に起きている。

地震予知流言は地域も時期も限定されたうわさなので調査しにくいが、週刊誌に地震予知の記事が掲載されると、その地域ではうわさになりやすいということが分かったので、週刊誌の記事で「地震がくる」と指摘された地域で調査を行うことにした。

1995年、米沢での調査

1995年の阪神・淡路大震災は多くの人に影響を与えた。そして、ある週刊誌がその年の7月に米沢付近で地震が起きるといふ予言を報道した。

実際に米沢市に行ってみると、特に小中学生を中心に、地震が来るということがうわさになっていることが分かった。そこで、現地の小中学校に協力していただいて簡単なアンケート調査を試みた。

時期・1995年7月。

対象・小中学生67名。

結果・地震予知流言を信じる人が29名、信じない人が34名と、ほぼ拮抗していた。

では、実際に避難準備行動をしたかどうかはどうであろうか。地震が来るといううわさを信じるかどうかと、避難の準備をしたかどうかとを掛け合わせてみると、次の図のようになる。

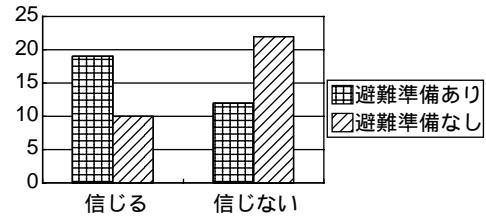


図5 地震予知流言を信じるかどうか、避難準備をするかどうか

信じる人(左側の2本)の方が準備をする人が多く(縞模様)、信じない人の方が準備をしないことが分かる。しかし、信じている人が全員準備をするわけでもなく、やや複雑な関係が見られた。

次に、避難準備のときに、何を持って地震に備えるかについて聞いてみたところ、1番多かったのが、食べ物、次いで、服や下着、第三位がお金であった。「勉強道具」を避難の時に持っていくと言った子どもはわずか一人であった。子どもたちが勉強を大事に思っているわけではない、というのがバレてしまう結果となった。

4-3 流言集団とキャリーオーバー効果

うわさの理論のところでも触れたように、うわさは「流言集団」という同一関心をもつ集団の中を流れやすい。そのような状況を調査する機会が訪れたのでアンケートを行った。その際、キャリーオーバー効果についても検討しようと試みた。キャリーオーバー効果とは、1つのうわさを一回聞いただけでは信じないのに、数回にわたって複数の人から聞くことによって信じてしまうようなプロセスのことである。

2003年秋、某大学心理学科ゼミ紹介のとき、ある教員が、「このゼミに入るとハト小屋の掃除が義務づけられている」といううわさが流れているが、それは違うと言った。

ゼミに入ることとハト小屋の掃除がどのよう

に結びつくかは、おそらく読者にもピンとこないだろう。それくらい曖昧な話である。だが、ある種の集団にはそれがうわさとして流れやすい状況があったようなのである。その集団とは心理学科の学生である。そこで心理学科とそれ以外の比較が可能な調査を行った。

時期・2003年1月。

対象・ある大学のある授業出席者 233名。

(心理学科122名 心理学科以外110名)

結果

このうわさを聞いた人	78名
聞いたことのない人	148名
その他	7名

心理学科の学生かそうでないかでうわさ接触の有無を尋ねると、下図のようだった。奥のレンガ模様が心理学科の学生で、ほぼ半数が聞いていた。一方、手前の白い棒は右側が高く、心理学科以外では聞いていない人が多いことを示している(図6)。

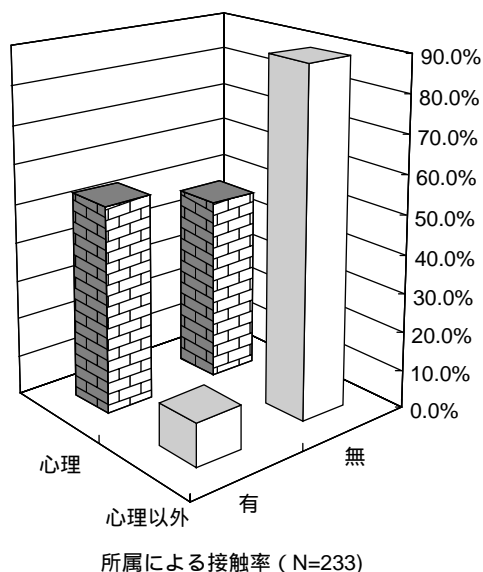


図6 所属によるうわさへの接触の違い

学生の所属によってうわさへの接触率には違いがあった。心理学科の学生の立場にたつと、

ゼミ選択という重要なことだったのでうわさが流れたと考えられるし、心理学科以外の学生の立場にたてば(曖昧であっても)重要ではなかったが故に流れなかったと考えられる。したがって、うわさの公式「 $R \sim I \times A$ 」が当てはまる例だと考えられよう。そして、その意味で心理学科は流言集団を形成していたと言えるだろう。

では何回くらい聞いてから人は信じたのだろうかということ、信じた人のうち60%が、最初に聞いた時にすぐに信じた、と答えたが、30%弱の人は数回聞いたことによってうわさを真実だと思うようになったと答えた。後者の人たちは、繰り返し同じうわさに接することによって「もしかしたらホントかも」と思うようになったのであり、キャリアオーバー効果が見られたのである。

次に、どのような人が他人に伝えたのか、という点に着目して分析してみたい。

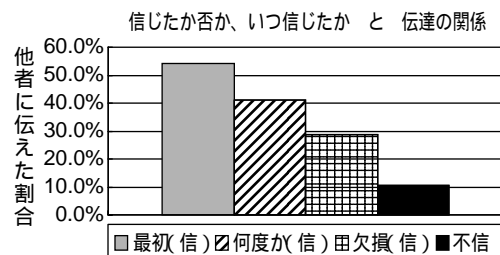


図7 信じた契機と伝達率の関係

図7が示すように、このうわさを信じなかった人では、その10%しか他人に伝えていないのに、一度聞いてすぐに信じた人では50%以上の方が他人にこのうわさを伝えていた。数回聞いてから信じた人は、それより低く40%ほどであった。

このことから、聞いて「すぐ」に「ホントのことだ」と思う人の方が他人に伝えやすいことがわかり、うわさ伝達に情動的要因が関係することが示唆される結果となった。

5 まとめに代えて

うわさとパニックをなくせるだろうか？

そういうことは無理だし、そんなことになれば生活が味気なくなってしまう。うわさを無くそうとする必要はない。ただし、うわさが人を傷つけたり、時には人の命を奪うこともあると知っておくことは重要である。

5 - 1 無用なうわさを防ぐには

- 1 すぐに伝えたいような時にこそ、一呼吸おいて考える。
- 2 考えもしないのにホントだと思うことこそ要注意。
- 3 決まり文句に注意

うわさには「決まり文句」がある。昔話が「むかしむかし・・・」で始まるように、うわさ話にも目印がある。それは

「友だちの友だち」

「必ず伝えましょう」

「すぐに伝えて」

のようなものであり、そういうフレーズが話の中に出てきたら、一呼吸おくことが必要である。

地震予知流言などで、子どもが信じているが嘘くさい、しかし、何度も聞いていると自分も信じてしまいそうになる（キャリーオーバー効果）という場合、どうしても心配ならば信頼おける機関（天文台や気象台など）に問い合わせても良いだろう。

また、地震予知流言の場合、子どもが何を恐れるかといえ、自分の命のことはもちろん、家族の命が失われる可能性である。したがって、八ナからバカにするような態度をとるより、親も一定の地震準備をする方が子どもは安心するものである。

5 - 2 パニックを防ぐには

個人的努力として以下のようなものがある。

- 1 深呼吸（息を吐くことから始めよう）
- 2 鏡をみる（自己意識を高める）
- 3 準備する（避難訓練をあなどるな）
- 4 信頼おける機関に問い合わせる

まず深呼吸。腹の底から息を吐くことで次の吸い込みも可能となり、落ち着くことができる。

事故や事件が起きたときに鏡を取り出す余裕があれば良いが、「とにかく鏡！」と思って取り出すと、自分の顔を見ることができて落ち着くものである。

避難訓練は、やってる時はバカバカしいと思いがちであるが、避難経路を身体が覚えているという意味であなどれない。突然の火災でアタマは大混乱！という時でも身体が逃げ方や逃げる方向を覚えていたりするのである。そういった意味で、身体を動かして逃げる道を覚えておくことは意外に重要である。

一方、事故現場などでは、専門家の冷静な対応がパニックを防ぐのに役立つ。1982年に、日航機が羽田沖に墜落した事故では、スチュワーデスが「飛行機は沈まない。絶対全員が避難できる」と言ったためパニックが起こらなかった。もしそういう言葉がなければ全員が一カ所に殺到して、犠牲を増やしたかもしれないという。専門家やプロがいない場合には、誰かがその役割を担って全体を統率するということが重要であろう。

文献（参考文献含む）

- 川上善郎・佐藤達哉・松田美佐 1997 『うわさの謎』 日本実業出版社。
- 木下富雄 1977 「流言」．『講座社会心理学』、3巻、1章、東大出版会。
- 佐藤達哉 2001 「流言 その定義と実際」．山口弘幸（編者）、『心理学リーディングス』、10章、ナカニシヤ出版。

- 佐藤達哉(編者) 1999 「流言,うわさ,そして
情報 うわさの研究集大成」、『現代のエス
ブリ』,特集号, 至文堂.
スメルサー, N.J. 1973 『集合行動の理論』 誠
信書房(原著1962年)
キャリントル 1979 『火星からの侵入』 川島書
店(原著1940年)
現代史の会 1983 『関東大震災』 草風館

新聞記事

- 朝日新聞, 1923年9月7日
毎日新聞, 1973年12月10日
朝日新聞, 1973年12月15日

付 情報提供のお願い

当たり屋チラシなど見かけた方は下記までご連絡く
ださい。

603-8577 京都市北区等持院北町56-1
立命館大学文学部助教授・佐藤達哉
satot@lt.ritsume.ac.jp
<http://www.psy.ritsume.ac.jp/~satot/>

注

- 1) 近年の近代日本史の実証的研究は, 関東大震災
時の虐殺について多くのことを明らかにしてい
る。それによると, 警察などの機関が情報を流

通するチャンネル(経路)として使われたこと
はほぼ疑いないと思われる。ただし, そうした
流通が指揮系統に沿ったものだったのか, 警察
官たちが「震災に居合わせた人」として事態に
巻き込まれた結果そうなったのか, ということ
は若干の問題なしとはしない。組織的な責任を
問わないということではないし, 警察などの行
政機関はそうした情報に惑わされるべきでは
ないということにはもちろん賛同する。そうでは
あるが, 組織に属さない人々が情報伝達を行い,
実際の虐殺行動に加わったということについて
考えることも重要であるから, 心理学の立場か
らは本文のように論じておきたい。ある事態を
複数の学範(ディシプリン)が協同して解明し
ようとする学融的(トランス・ディシプリナリ)
な取り組みでは, あえて異なる見解をぶつける
ことがその後の展開のために有用であるから,
ここでは心理学という立場から書いているとい
う側面も理解されたい。この点については機会
があれば研究を深めると同時に様々な討論をし
ていきたい。

- 2) このような事態が厄介なのは, 複数流れている
写真のうちどれかを否定すると, 結果的に正し
い写真が同定されてしまうところにある。だか
らといって訂正もされないまま複数の人の写真
(しかもこの場合は未成年)が犯人像として流
通するのはやはり問題である。

(2003.11.28. 受理)